## 五ヶ瀬町所在

# がぐち 樋口遺跡

国道 218 号五ヶ瀬高千穂道路(室野工区)整備事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書

2024

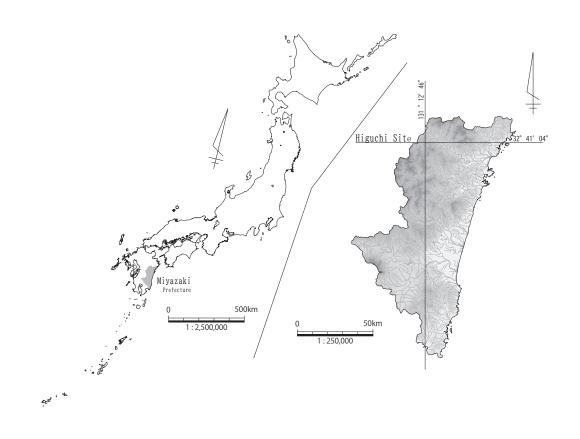
宮崎県埋蔵文化財センター

## 五ヶ瀬町所在

# でぐち 樋口遺跡

Higuchi Site

## 国道218号五ヶ瀬高千穂道路(室野工区)整備事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書



2024

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県教育委員会では、国道 218 号五ヶ瀬高千穂道路整備事業に伴い、五ヶ瀬町三ヶ所に所在する樋口遺跡の発掘調査を令和4年度に実施しました。本書は、その発掘調査の記録を掲載した報告書です。

今回報告する樋口遺跡では、縄文時代のものと考えられる陥し穴跡や、弥生時代後期に属するとみられる竪穴建物跡、縄文時代の土器や石器、弥生時代後期~古墳時代前期の土器、中世・近世の陶磁器類などが出土し、遺跡が立地する斜面地で連綿と展開した人々の生活の一端が明らかになりました。

本書で報告する発掘調査成果や出土遺物等は、学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用し、郷土の歴史や埋蔵文化財保護に対する理解の一助といたします。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、御協力いただいた関係諸機関および関係 各位、地元の方々に対し心より厚く御礼申し上げます。

令和6年2月

宮崎県埋蔵文化財センター 所 長 吉本 正典

## 例 言

- 1 本書は、国道 218 号五ヶ瀬高千穂道路(室野工区)整備事業に伴い、宮崎県埋蔵文化財センターが令和4年度に実施した、五ヶ瀬町大字三ヶ所に所在する樋口(ひぐち)遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、国土交通省延岡河川国道事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。調査期間は令和4年7月26日から令和4年11月30日(実働73日間)である。
- 3 発掘調査は、留野優兵・川嶋信平・守部丘大・本部裕美が担当し、宮崎県埋蔵文化財センター各職員の協力を得た。現地調査における図面作成及び写真撮影等は、調査担当者が分担して行った。
- 4 発掘調査及び報告書作成に伴う空中写真撮影は九州電力株式会社、自然科学分析(放射性炭素年 代測定・樹種同定)は株式会社古環境研究センターにそれぞれ業務委託した。
- 5 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターにおいて、主として留野が整理作業員の補助を得て行った。デジタル図化作業は川嶋・守部の協力を得て留野が行った。また、遺物の写真撮影は主に東憲章が行った。
- 6 本書で使用した位置図等は、国土地理院発行の電子地形図 1:25,000 を基に作成している。
- 7 本書で使用した各種略記号は、以下のとおりである。

SA: 竪穴建物跡 SB: 掘立柱建物跡 SC: 土坑・陥し穴跡 SZ: その他 gr: グリッド K-Ah: 鬼界アカホヤ

- 8 本書に掲載している土層断面及び土器の色調等については、農林水産省農林水産技術会議事務局 監修『新版標準土色帖』(2008 年版) に拠る。
- 9 本書における図中の方位は、国土座標第Ⅱ系(世界測地系)の座標北(G.N.)、国土地理院発行地図は真北を指す。また、本書中の座標値についても世界測地系に準拠しており、標高は海抜絶対高である。
- 10 本書の執筆と編集は留野が行った。
- 11 出土遺物およびその他の諸記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターにおいて保管・収蔵している。

## 本 文 目 次

第Ⅰ章 は	まじめに こうしゅうしゅう
第1節	調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第2節	調査の組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第3節	発掘調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第4節	発掘調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
	遺跡の立地と環境
第1節	地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第2節	歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第Ⅲ章 訓	間査の成果
第1節	遺跡の立地と基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第2節	主要遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第3節	出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第Ⅳ章 自	自然科学分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
Fritz V V La J.	

		挿	図	目次	
第1図	周辺地形図 ・・・・・・・・・		3	第 11 図 SC120・SC328 遺構実測図・・・・・ 10	0
第2図	周辺遺跡分布図 ・・・・・・・・		4	第 12 図 SC453 遺構実測図 ・・・・・・・ 10	0
第3図	基本土層図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		5	第 13 図 SC476・SC524 遺構実測図 ・・・・・ 1	1
第4図	遺構配置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		6	第 14 図 SZ614 遺構実測図 ・・・・・・・ 1	1
第5図	SA33 遺構実測図 ・・・・・・・・		7	第15図 遺物実測図①(土器・土師器類)・・13	3
第6図	SB491 遺構実測図 ・・・・・・・・		7	第16図 遺物実測図②(石器・鉄製品類)・・14	4
第7図	SB492 遺構実測図 ・・・・・・・・		8	第17図 遺物実測図③ (陶磁器類)・・・・・ 14	4
第8図	SB493 遺構実測図 ・・・・・・・・		8	第 18 図 暦年較正結果 ・・・・・・・・ 17	7
第9図	SB615 遺構実測図 ・・・・・・・・		9	第19図 暦年較正年代マルチプロット図 ・・ 18	8
第10図	SC92 遺構実測図 ·····		9	第20図 遺構埋土別分布図・・・・・・・ 20	0
		表	目	次	
第1表	基本土層注記 ・・・・・・・・・		5	第5表 調査区内検出土坑の計測値一覧表・・ 16	6
第2表	遺物観察表①(土器類)・・・・		15	第6表 樋口遺跡の放射性炭素年代測定結果・ 1	7
第3表	遺物観察表②(石器・鉄製品類)		15	第7表 樋口遺跡における樹種同定結果・・・ 19	9
第4表	遺物観察表③(陶磁器類)・・・		16		
		写	真	目次	
写真 1	SA33 炉跡出土炭化種実 · · · · ·		14	写真図版 3 ・・・・・・・・・・・ 25	5
写真2	樋口遺跡の木材写真 ・・・・・・		19	写真 10 SC328 完掘状況	
写真図版	<u> </u>		23	写真 11 SC473 完掘状況	
写真3	<b>樋口遺跡遠景</b>			写真 12 SC524 完掘状況	
写真4	調査区全景			写真 13 SC120 炭化材出土状況	
写真図版	<del>2</del> 2 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		24	写真 14 SB491 · 492 · 493 完掘状況	
写真5	5 調査区中央部土層確認用壁面			写真図版4 ・・・・・・・・ 26	6
写真6	調査区東壁土層断面			写真 15 出土土器類	
写真7	'調查区周辺法面土層断面			写真 16 出土陶磁器類	
写真8	3 SA33 炉跡検出状況			写真 17 出土石器類	
写真 9	) SC92 完掘状況			写真 18 火打金	

## 第 I 章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

一般国道 218 号は、熊本県熊本市を起点とし、熊本県上益城郡山都町及び宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町・高千穂町・日之影町を経て延岡市に至る総延長 146 kmの幹線道路である。急峻な山間部を縫うように横断する同路線は、急カーブや急勾配の坂が連続することから、その一部の五ヶ瀬町大字三ヶ所から高千穂町大字三田井までの延長 9.2 km区間を、自動車専用道路「国道 218 号五ヶ瀬高千穂道路」として整備が行われることとなった。また、この道路は、大雨や大規模地震などの災害発生時に国道 218 号の代替道路となり、宮崎県北地域と熊本方面を結ぶ唯一の緊急輸送道路一次ネットワークとしての機能確保も目的としており、将来的には九州中央自動車道(九州横断自動車道延岡線)と一体化する路線として、平成 30 年度に新規事業化された。

この事業予定地内における埋蔵文化財の取扱いについては、令和元年度に事業実施側である国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所から県の埋蔵文化財保護当局である宮崎県教育庁文化財課(県文化財課)に対して協力依頼があった。令和2年3月、県文化財課は、事業予定地内の分布調査を実施し、周知の埋蔵文化財包蔵地及び埋蔵文化財が包蔵されることが推測される複数箇所の範囲について報告を行った。この報告を基に両者協議の結果、これらの範囲については、事業計画の進捗に伴い用地買収が終了した部分から、試掘・確認調査を随時実施することとなった。

県文化財課は、令和3年3月と9月、道路起点付近の五ヶ瀬町大字三ヶ所の周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外である箇所の試掘調査を実施し、部分的に埋蔵文化財が残存することを確認した。これらの試掘結果を基に、五ヶ瀬町教育委員会と県教育委員会で協議した結果、令和3年11月、試掘調査で埋蔵文化財が確認された箇所を中心とした範囲が新たな周知の埋蔵文化財包蔵地「樋口遺跡」として登録された。

今回の発掘調査実施区域においては、延岡河川国道事務所から令和4年3月2日付で埋蔵文化財発掘通知が提出された。埋蔵文化財の取扱いに関する協議を両者で重ねた結果、建設を計画する樋口遺跡の一部分の約2,500㎡については、現状保存が困難であることから、やむを得ず記録保存措置として発掘調査を実施することとなった(同年4月18日付で宮崎県教育庁から発掘調査指示の回答)。同年4月26日、国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所と宮崎県の間で発掘調査委託契約が締結され、同年7月、県の発掘調査機関である宮崎県埋蔵文化財センターによる発掘調査の実施へと至ったものである。

## 第2節 調査の組織

桶口遺跡の発掘調査・報告書作成にあたっては下記の体制で実施した(令和4~5年度)。

[調査主体] 宮崎県教育委員会

[事業調整等] 宮崎県教育庁文化財課

主查 沖野 誠(令和4年度)

主查 谷口 晴子(令和5年度)

[発掘調査・整理作業及び報告書作成] 宮崎県埋蔵文化財センター

所長 菊村 祐司(令和4年12月まで)

吉本 正典(令和5年2月から)

副所長兼総務課長 片伯部 真一(令和4年度)

総務課長 寺原 尚徳(令和5年度)

総務担当リーダー 阿波野 ゆかり(令和4年度)

原田 佳奈子(令和5年度)

調査課長 東 憲章(令和5年度より副所長兼任)

調査課調査第二担当リーダー 平井 祥蔵(令和4年度)

甲斐 貴充(令和5年度)

調査課調査第二担当 留野 優兵(本調査・整理作業・報告書担当)

 調査課調査第二担当
 守部 丘大

 調査課調査第二担当
 川嶋 信平

 調査課調査第二担当
 本部 裕美

調査協力等(五十音順) 五ヶ瀬町教育委員会・五ヶ瀬町第5公民館

## 第3節 発掘調査の方法

グリッドの設定 調査区全体を国土座標(世界測地系)に拠る 10 m× 10 mのグリッドに設定し、南北 方向のグリッド線に数字、東西方向のグリッド線にアルファベットを付与して、その交点をグリッド名 とした。

作図記録 発掘調査の円滑化・迅速化を図るため、遺物の出土位置の記録に伴う三次元情報の取得及び遺構の作図等については、トータルステーションと連動した電子平板 [(株) CUBIC 製の「遺構くん」ソフト搭載ノート型パソコン] を使用した。ただし、遺構図作成においては、使用機器の特性や使用者の技術、作業の進捗等により各遺構の土層断面図等は調査員が図化を行った。また、一部の遺構については、Agisoft 社の SfM/MVS ソフト Metashape で作成した 3D モデルから生成したオルソ画像を実測の参考とした。地形測量における等高線は、電子平板で取得した任意のメッシュデータの記録と遺構上端の標高を加えたデータからソフトウェア上で作成、現地にて検討・修正したものを掲載している。

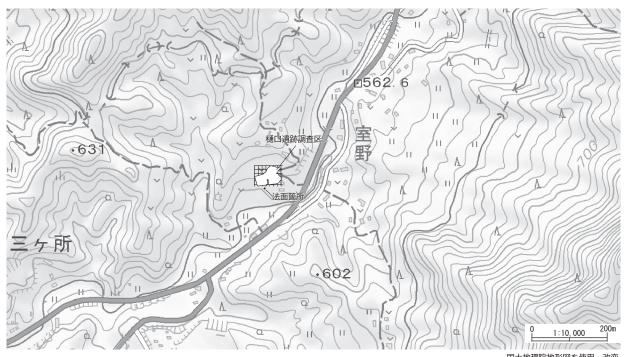
写真記録 遺構や遺物出土状況等の写真撮影機器としては、一眼レフデジタルカメラ(フルサイズ:3,600万画素)を使用した。デジタル画像の保存形式はTiffとRaw形式を基本としている。遺構面の空中写真撮影については業務委託によるドローンを用いた撮影を行った。

## 第4節 発掘調査の経過

発掘調査は、令和4年7月26日~令和4年11月30日まで実施した。所在地は宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町三ヶ所10527-3他、調査対象面積は2,500㎡である。調査経過の概略は次のとおりである。令和4年7月26日から重機を用いて近世~現代の耕作土と推定されるI~IX層の除去を行った。同時に現場事務所の設置、駐車場の整備等を行った。8月から人力による掘削作業を開始し、調査区西側中央部で掘立柱建物跡3軒、調査区北東部で竪穴建物跡1基・掘立柱建物跡1軒、調査区南東側で陥し穴跡1

基、その他調査区内各所で土坑やピットを多数確認した。安定した遺物包含層は調査区内に残存してい なかったが、調査区西側の地形のくぼみに堆積したにぶい黄褐色土 (SZ614) から弥生時代終末期~古 墳時代前期頃の遺物がまとまって出土した。11月22日にX層上面で空中写真撮影を、その後11月30 日まで遺構の掘削作業及び記録作業を行い、調査を終了した。

調査期間中、10月4・5日に五ヶ瀬町内の中高生を対象とした現場見学会、11月 22日に地域住民を 対象とした現地説明会をそれぞれ行った。



第1図 周辺地形図

国土地理院地形図を使用・改変

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

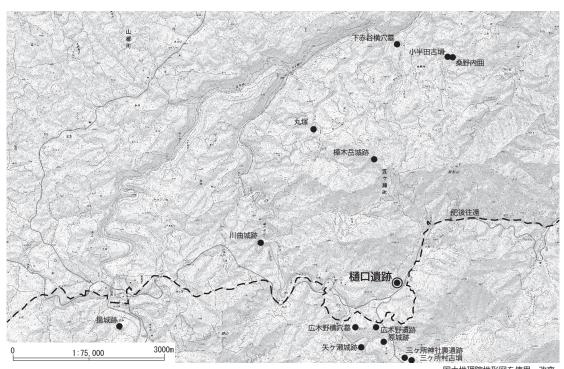
## 第1節 地理的環境

樋口遺跡が位置する西臼杵郡五ヶ瀬町は、九州のほぼ中央部、宮崎県の北西端に位置する。宮崎県庁 所在地である宮崎市からは直線距離で約80km離れている。北東は赤塚岸山から北に延びる稜線と五ヶ 瀬川を境界として高千穂町、北西は白岩山から熊本県旧蘇陽町市街地へと伸びる稜線と五ヶ瀬川を境界 として熊本県上益城郡山都町、南は白岩山から黒岳をつなぐ稜線を境界として椎葉村、南東は黒岳から 赤塚岸山をつなぐ稜線を境界として諸塚村と接する。

五ヶ瀬町の町域は、最も長い部分で南西から北東に 23 km、北西から南東に 12 kmで、河川流路や山岳 稜線に沿っている。町内を南北に流れる五ヶ瀬川とその支流の三ヶ所川は、町の北部で合流して熊本県 と宮崎県の境を為す。町域は九州山地に含まれ、標高 1,000 m以上の山々が並んでいる。なかでも祇園 山山頂付近では、石灰岩から4億3,000万年前のサンゴや三葉虫、ウミユリなどの古生代の生物化石が 見つかっている。これらは九州島内で最も古い層の1つである祇園山層に含まれるもので、九州山地を 構成する中生代層の秩父類帯と共に五ヶ瀬町内の地形の基盤となる。古生代・中生代層からなる低地部 分は、更新世に阿蘇山に由来する火砕流噴出物によって埋積され、その後河川による浸食を被り、現在 見られるような起伏の小さい台地地形や、阿蘇溶結凝灰岩の崖からなる深い谷地形が形成された。谷地 形をなす阿蘇山に由来する火砕流噴出物の上には、さらにアカホヤ等の火山灰層が堆積して小規模な台 地地形を形成し、台地沿いに流れる小河川が、砂岩・蛇紋岩などから構成される地層と共にこれらの台 地を侵食して傾斜の緩やかな地形を形成している。

#### 第2節 歴史的環境

五ヶ瀬町内で行われた本格的な発掘調査事例は少なく、表採資料と合わせて断片的に歴史的事象が知られている。ここでは樋口遺跡が所在する五ヶ瀬町の歴史的環境について、旧石器時代から中世までの調査結果と共に概観する(第2図)。五ヶ瀬町内では現時点で旧石器時代の遺跡・遺物の出土事例はない。縄文時代の遺跡としては、三ヶ所神社裏遺跡で早期の縄文土器片が採集されている(乙益1960)。古墳時代の遺跡としては、下赤谷横穴墓群・三ヶ所村古墳・小半田古墳・丸塚・広木野遺跡・広木野横穴墓群が確認されている。丸塚では子持勾玉の採集が記録されている他、下赤谷横穴墓群では発掘調査が行われており、鉄刀などが出土している(五ヶ瀬町教育委員会1990)。広木野遺跡では、古墳時代後期の竪穴建物跡が見つかっており、須恵器・土師器等も出土している(宮崎県埋蔵文化財センター1997)。古代においては『倭名類聚抄』に五ヶ瀬町域を含む五ヶ瀬川上流域全体が臼杵郡智保郷と呼ばれ、中世になると『建久図田張』に妻万宮(現西都市都萬神社)領として臼杵郡高智尾社八町、領主は弁済使土持太郎禰宜と記され、後に高智尾庄と呼ばれるようになる。中世には原城跡・矢ヶ瀬城跡・坂本城跡など各地に山城や陣跡が確認されている(宮崎県教育委員会1998)。また、現在の国道218号線に沿うルートで、五ヶ瀬町内を現在の延岡市と熊本市を結ぶ街道である肥後往還が通っており、近代に下って西南戦争の際は、薩摩軍・官軍の双方が日向・肥後の戦線を移動するために利用していた。



第2図 周辺遺跡分布図

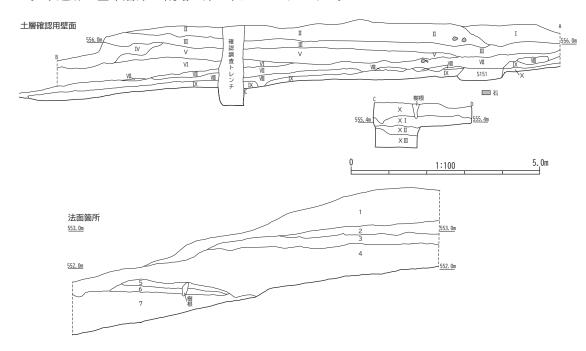
国土地理院地形図を使用・改変

## 第Ⅲ章 調査の成果

## 第1節 遺跡の立地と基本層序

樋口遺跡は、五ヶ瀬川支流の室野川北岸沿いに展開する緩やかな谷地形の傾斜面に立地しており、周辺の標高は約550~570 mであり、調査区内の標高は554~559 mである。調査区の位置する斜面頂上の平坦面には現在、住宅が立ち並んでおり、隣接する斜面には段々畑が造成されている。調査以前は、調査区も水田及び畑として利用されていた。

基本土層は、第4図遺構配置図に示した調査区内中央の確認用壁面と下層確認トレンチ、調査区の南に位置する法面箇所で確認した。調査区内の基本土層として I ~ XII層、法面箇所で1~7層を認識している。本遺跡の基本層序の概略は第1表のとおりである。



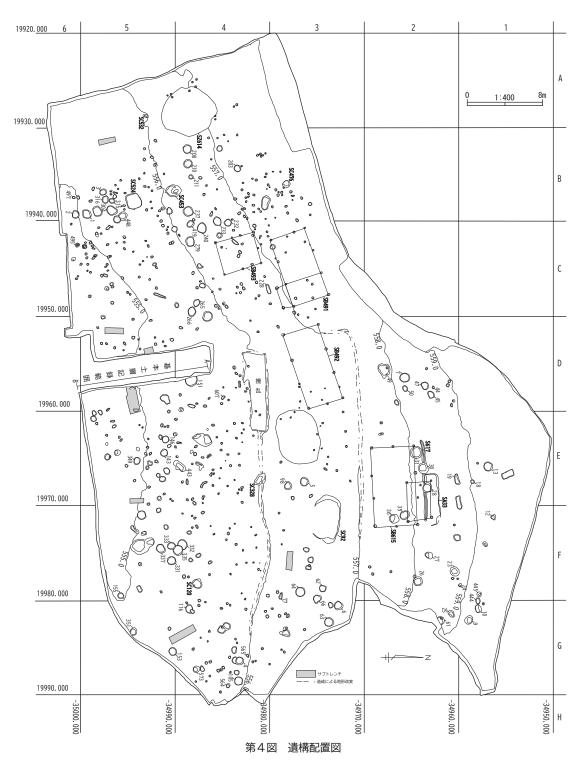
第3図 基本土層図

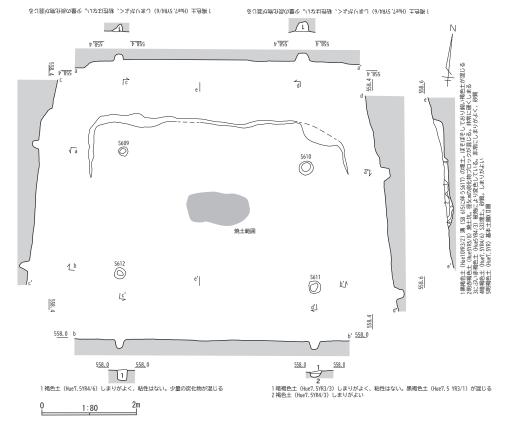
#### 第1表 基本土層注記

土層確認	用壁面注記	
層番号	土色	
I	暗褐色土 (10YR3/4)	表土・造成土。 黄橙色土(Hue7.5YR7/8)が帯状に混じり、非常にしまりがよく、粘性はない。
П	黒褐色土 (7.5YR7/8)	造成土。径2mmの黄橙色土(Hue7.5YR7/8)のブロックが混じる。しまりがよく、若干粘性がある。
Ш	灰褐色土 (7.5YR4/2)	造成土。砂質で非常にしまりがよい。粘性はない。
IV	灰褐色土 (7.5YR4/2)	造成土。橙色土(Hue7.5YR6/8)のブロックや炭化物が多く混じる。しまりがよい。
V	灰褐色土 (7.5YR6/2)	旧水田層。しまりがよく、小礫が混じる。鉄分の沈着が見られる。橙色土 (Hue7.5YR6/8) のブロック、炭化物が混じる。粘性がある。
VI	灰褐色土 (7.5YR4/2)	旧耕作土。小礫や炭化物が混じる。
VII	黒褐色土 (7.5YR3/2)	旧耕作土。小礫と径5mmの炭化物が混じる。しまりがよく、粘性はない。
VIII	灰白色土 (7.5YR8/2)	旧耕作土。しまりがよく、粘性がある。
IX	黒褐色土 (7.5YR3/1)	旧表土。褐色土(Hue7.5YR6/1)の径5mmのブロックが混じる。
X	褐色土 (7.5YR4/6)	この層の上面で遺物・遺構を検出。しまりがよく、粘性はない。炭化物粒を含有する。
XI	にぶい褐色土 (7.5YR6/3)	しまりがよい。
XII XII	にぶい橙色土(7.5YR7/3) 黒褐色土(7.5YR3/2)	アカホヤ相当層。ブロック状に橙色土 (Hue7.5YR3/2) を含有する。砂質。法面での2層に相当する。 非常に粘性が強く、しまりがよい。3mm大の黒色鉱物を含有する。法面での4層に相当する。
法面箇所法		
層番号	土色	まし、世担以々ノ河 ロッ
1 2 3 4 5 6	橙色土 (7.5YR4/6) 黒褐色土 (7.5YR3/2) 黒褐色土 (7.5YR3/2) 褐色土 (7.5YR4/3) 黒褐色土 (7.5YR3/2) 明褐色土 (7.5YR5/8)	表土 草根が多く混じる アカホヤ層。しまりがよく、粘性はない。調査区内XII層相当。 アカホヤ降灰以前の旧表土。 アカホヤ降灰以前の旧表土。非常に粘性が強く、しまりがよい。 しまりがよい。明褐色(Hue7.5YR5/8)のロームと黒褐色土(Hue7.5YR3/2)が混じる。 しまりがよい。 ローム由来の土壌。しまりがよく、黒色鉱物が混じる。
<del></del>	731302 (1.011070)	Figure 2 and Compared to the C

## 第2節 主要遺構(第4図~第14図)

樋口遺跡の発掘調査では、陥し穴跡3基、竪穴建物跡1基、掘立柱建物跡4棟、その他多数の土坑、ピットが検出された。多くは基本土層X層上面で検出されている。出土遺物や放射性炭素年代測定の結果から、遺構の時期は縄文時代後期から17世紀前半の近世初頭までのものと考えられる。遺構内からの遺物の出土は少なく、安定した遺物包含層も検出されなかった。近世以降の耕作・造成による影響を受けたものと考えらえる。以下、主要な遺構について報告する。

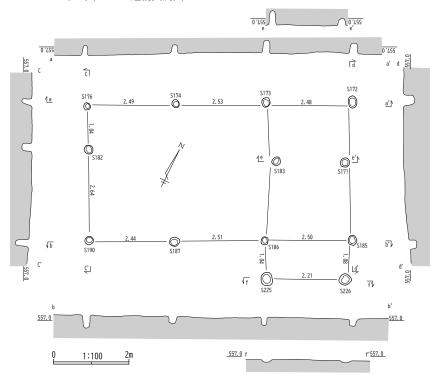




#### 第5図 SA33 遺構実測図

## SA33 竪穴建物跡(第5図)

基本土層 X層上面の E-2・F-2gr において検出した。削平を受けており、北側と東側・西側の一部の掘り込みを検出した。規模は東西 5.4 m×南北1.6 m、平面形は隅丸方形を呈しており、深さ 0.2 mである。断面の形状は、三角形を呈し、斜面の傾斜に沿ってある。これは SA33 の廃絶ないる。これは SA33 の廃絶後、土砂の流出や崩落、切り合う SB615 の建設に伴う整地によって削平を受けたものと



第6図 SB491 遺構実測図

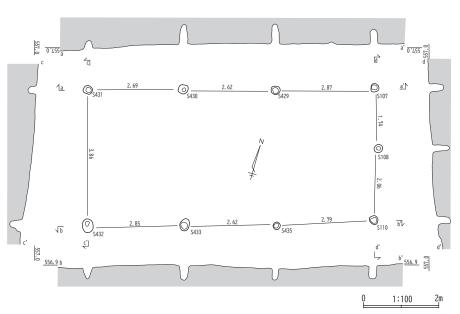
考えられる。床面では柱穴  $S609 \sim 612$  を検出した。柱穴は床面の四隅に位置しており、距離は東西  $3.9 \sim 4.1$  m、南北 2.5 mである。柱に囲まれた床面中央では、熱を受けて赤化した焼土を検出した。赤化した焼土は、東西 0.75 m×南北 0.60 m、深さ 0.1 mの範囲に見られ、その周囲には炭化物が散乱していることから炉跡と考えられる。焼土周辺の土を水洗して回収した炭化物には、オオムギ・堅果類等と

みられる炭化種実が含まれていた。焼土の周囲から採取した炭化物を対象に放射性炭素年代測定を行った結果、1900 ± 20 年 BP の年代を得ている。

SB491 掘立柱建物跡(第6図) 基本土層XI層上面の C-3gr において検出した。規模は桁行3間、梁行2間(一部3間)、身舎面積31.9 ㎡である。建物は東西棟で、梁行の主軸方向は N-18° -E。SB491 を構成する柱穴は、 $S171 \sim 174 \cdot 176 \cdot 182 \cdot 183 \cdot 185 \sim 187 \cdot 190 \cdot 225 \cdot 226$  の13 基である。柱穴の規模は、径0.23  $\sim$  0.3 m、深さ0.15  $\sim$  0.45 mである。柱穴から柱の抜取痕や柱痕は検出できなかった。柱穴間の距離は、桁行が2.45  $\sim$  2.54 m、梁行が1.05  $\sim$  3.9 mである。柱穴からの出土遺物はないため、時期を特定することはできないが、 $SB492 \cdot SB493$  とは柱穴の埋土がそれぞれ黒褐色土で共通しており、梁行方向が揃っていることから、3 棟は近い時期に使用されていたと考えられる。

SB492 掘立柱建物跡(第7図) 基本土層 X 層上面の D-3gr 中央において検出した。規模は桁行3間、梁行2間(一部1間)、身舎面積32.4㎡である。周辺の遺構との切り合い関係はない。建物は東

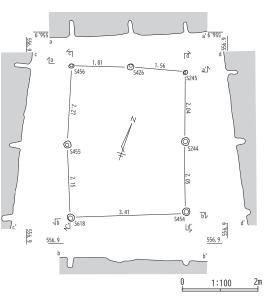
西棟で梁行の主軸方向は N-19°-E。SB492を構成 する柱穴は、S107·108・110·113·429~435の9 基である。柱穴の規模は、径 0.23~0.31 m、深さは 0.16~0.45 mである。それぞれの柱穴から柱の抜き取り痕や柱痕は検出されなかった。柱穴間の距離は、桁行が 2.63~2.88 m、梁行は 1.74~3.86 mである。柱穴からの出土遺物



第7図 SB492 遺構実測図

はないため時期を特定することができないが、SB491・493 とは柱穴の埋土がそれぞれ黒褐色土で共通しており、梁行 の主軸方向が揃っていることから、近い時期に使用されて いたと考えられる。

SB493 掘立柱建物跡 (第8図) 基本土層 X 層上面の C-4gr において検出した。規模は桁行 2 間、梁行 2 間、身舎面積 15.7 ㎡で、桁行の主軸方向は N-19° -E。 SB493 を構成する柱穴は、S244・245・425・426・454  $\sim$  456・618 の8基で、柱穴の規模は径  $0.16 \sim 0.28$  m、深さ  $0.1 \sim 0.56$  mである。それぞれの柱穴から柱の抜き取り痕や柱痕は検出されなかった。柱間の距離は、桁行で  $2.04 \sim 2.28$  m、梁行で  $1.57 \sim 1.86$  mである。柱穴からの出土遺物はなかっため、時期を特定することはできないが、SB491・492

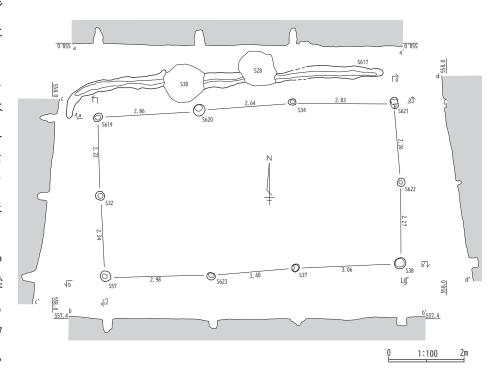


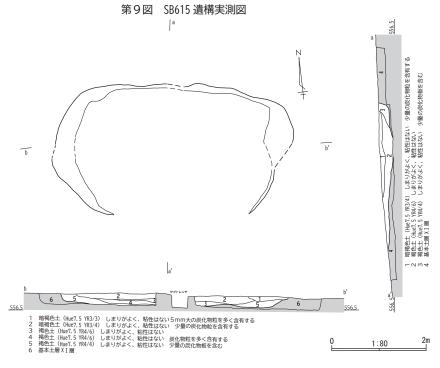
第8図 SB493 遺構実測図

とは柱穴の埋土がそれぞれ黒褐色土で共通しており、桁行の主軸が揃っていることから、近い時期に使用されていたと考えられる。

SB615 掘立柱建物跡(第9図) 基本土層 X 層上面の  $E-2 \cdot F-2$ gr において検出した。規模は桁行3間、梁行2間、身舎面積37.8 ㎡で、桁行の主軸方向はN-3°-E。SB615を構成する柱穴は、S32・34・37・38・57・619 ~ 623 の 10 基である。柱穴の規模は、径0.22 ~ 0.25 m、深さ0.15 ~ 0.42 mである。それぞれの柱穴から柱の抜き取り痕や柱痕は検出されなかった。柱間の距離は、桁行で2.4 ~ 3.0 m、

梁行で 2.2 ~ 2.3 mで ある。柱穴からの出土 遺物はなかったため、 時期を特定すること はできない。SB615 は 北側に雨落溝と考え られる遺構(S617)を 伴っている。溝の長さ は東西9m、屈曲した 南北 1.1 m、幅 0.3 m、 現状の深さ 0.2 mであ る。北側桁行と西側梁 行の角に沿って、溝も 屈曲している。S617 は、S30とS28に切ら れており、SA33を切っ ている。



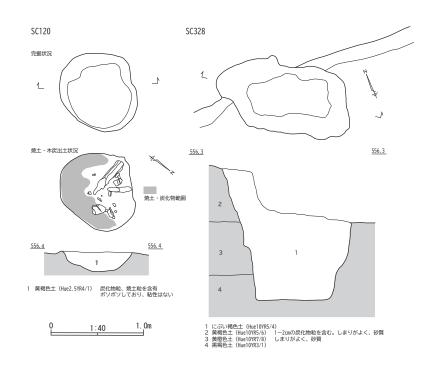


第 10 図 SC92 遺構実測図

東西長 4.75 m、南北長 2.18 m、深さ 0.27 mである。遺物は出土していない。埋土中の炭化物を用いて放射性炭素年代測定を実施した結果、1730 ± 20 年 BPの結果を得ている。

#### SC120 土坑(第11図-左)

基本土層知層上面のF-4grにおいて検出した。平面形は円形を呈しており、南北0.8 m、東西0.8 m、深さ0.2 mである。埋土は黄灰色で、基本土層畑層に下層の炭化物と灰が混じったものである。埋土下に炭化物、炭化した木材、灰が堆積してい



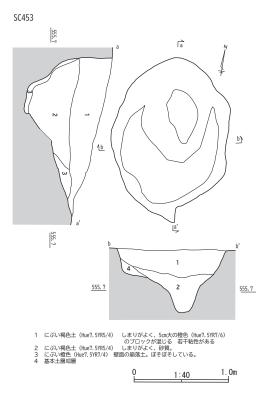
第 11 図 SC120·SC328 遺構実測図

た。遺構床面の一部が被熱によって赤化していることから、木材等が SC120 内で燃やされた後、埋められたと考えられる。炭化材を対象に放射性炭素年代測定と樹種の同定を実施し、年代 180 ± 20 年 BP、樹種に薪材として利用されることの多いクスノキ科とサクラ属が含まれているという結果を得ている。以上から SB120 は、焚火等で一時的に薪を使用した後、埋め戻されたと考えられる。

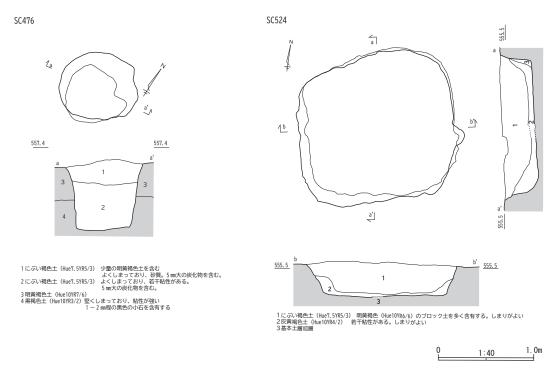
SC328 陥し穴跡(第11図-右) 基本土層X層上面のE-4gr 北東側において検出した。長軸1.3 m、

短軸 0.8 m、現状での深さ 1.5 mで、遺構の南側上半分は 削平されている。断面形状は逆台形、底面は長軸 0.7 m、短軸 0.35 mの長方形を呈する。遺構壁面土層の観察で基本土層 X層からアカホヤ層下位の基本土層 X順層まで掘削されている。埋土は褐色土の単層で、短期間のうちに埋没したとみられる。形状や掘削深度から陥し穴跡と考えられるが、出土遺物はなく、底面で逆茂木は検出していない。埋土中の炭化物を用いて放射性炭素年代測定を行った結果、3680 年± 20 年 BP の年代を得ている。

SC453 陥し穴跡(第 12 図) 基本土層 XI層上面の B-4・5gr において検出した。長軸 1.7 m、短軸 1.2 m、深さ 1.1 m、平面形は南北に長い長楕円形を呈する。東西方向の断面形は砲弾形、南北方向の断面形は南側に一段テラスをもち、北側に向かって深くなる。遺構の埋土は褐色である。基本土層 XI層を掘り込んでおり、下層の埋土は橙色土の小粒を含んでいる。形状から陥し穴跡と考えらえる。出土遺物はないため、時期は特定できない。



第12図 SC453 実測図

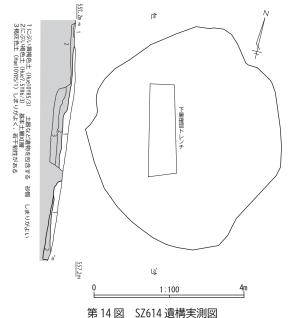


第13図 SC476·SC524 遺構実測図

SC476 陥し穴跡(第 13 図 - 左) 基本土層 XI層上面の B-3gr 南側において検出した。S197 に切られている。長軸 0.85 m、短軸 0.65 m、深さ 0.65 mである。断面形はバケツのような形状を呈しており、底面は平坦である。壁面の観察では基本土層 XI層からその下の黒色土まで掘り込んでいる。底面に逆茂木の痕跡は検出していないが、形状から陥し穴跡と考えられる。

SC524 土坑(第13図-右) 基本土層知層上面のB-5gr 東側において検出した。東西1.5 m、南北1.6 m、 検出面からの深さ0.4 m。平面形は隅丸正方形で、断面形は逆台形を呈する。土層は下層に褐色土、上 層に橙色土のブロックを含む褐色土が堆積しており、開口して土が堆積した後、人為的に一度に埋めら れたと考えられる。遺構内からは土師器胴部片2点、遺構表面から土師器片1点が出土している。遺構

の埋没時期は、出土遺物から古墳時代と推定される。 SZ614(第14図) 基本土層X層上面のA-4・5、B-4・5grにおいて検出した。埋土中からは比較的多くの土師器・土器の破片が出土した。平面は不定形で、南北 6.35 m、東西 6.5 m、深さは 0.2 mである。明確な堀込みは認められず、造成以前に存在していた包含層の一部が削平を受けずに残ったものと考えられる。



**年 14 凶 32014 退開天**劇

#### 第3節 出土遺物

本調査区から出土した遺物はコンテナ6箱分である。少量の遺構内出土遺物を除くと、調査区内で安定した遺物包含層が存在せず、検出面とした基本土層X層の表面で遺物が出土している。ただし、SZ614は造成以前に存在していた遺物包含層の一部であったと考えられる。

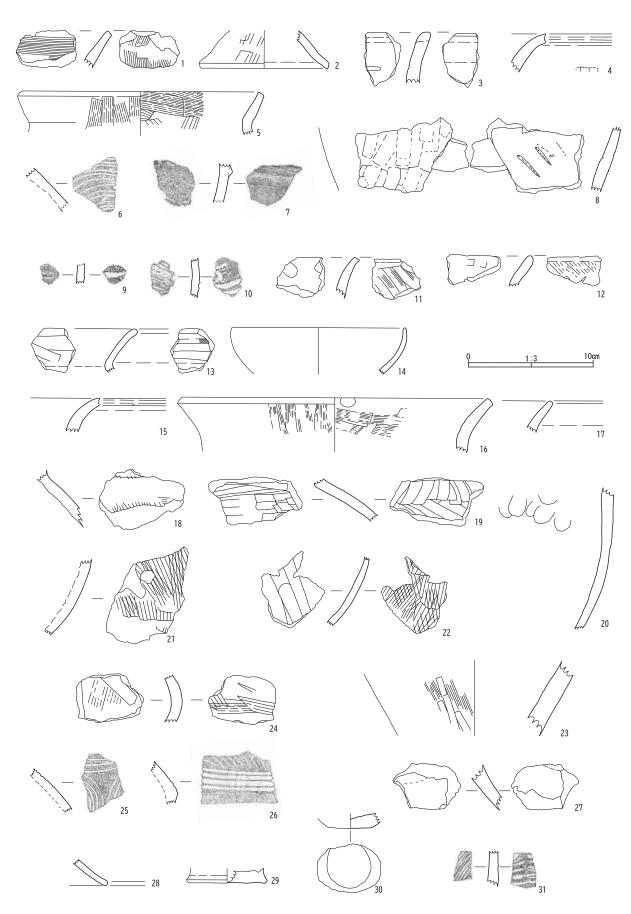
時期別に出土遺物を概観すると、縄文時代後期の磨消縄文土器、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて熊本県球磨地方を中心に分布する免田式土器の長頸壺、土師器、肥後系脚付甕、中世の龍泉窯系青磁・景徳鎮窯系染付、近世以降の国産陶磁器類がある。各出土遺物の種類・名称・法量などについては、遺物観察表(第2表~第4表)に記載している。以下、主要なものについて概述する。

土器・土師器類(第 15 図 1 ~ 31) 1 は SC351 から出土した土師器の口縁部である。内外面にナデ調整が見られる。2 は SC524 から出土した土師器脚付壺の脚部片である。3・4 は SZ614 から出土した。6 は弥生時代後期~古墳時代初頭頃の免田式土器長頸壺の胴部片で、重弧文が施されている。7 は弥生時代後期の工字突帯文土器の胴部で、突帯が施されている。9~31 は検出面であるX層表面または周辺での表採等で出土した遺物である。9・10 は磨消縄文土器の胴部片である。21・22 は土師器の胴部片で、外面はハケ目調整が施されており、布留系土器の甕の胴部と考えられる。25・26 は弥生時代後期~古墳時代初頭頃に見られる免田式土器長頸壺の胴部片で、重弧文が施されている。27 は肥後系の土師器脚付甕の脚部片である。内面に砂が付着する。

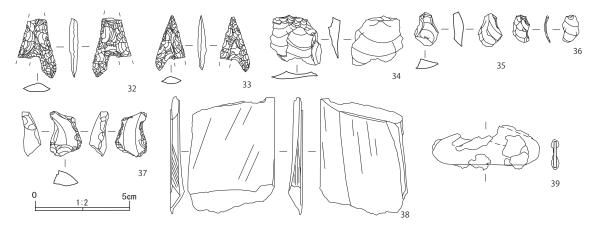
石器・鉄製品類(第 16 図 32 ~ 39) 32・33 はチャート製の打製石鏃である。32 は A-5gr の SC532 から出土しており、先端と片脚を欠損している。33 は SZ614 から出土しており、片脚を欠損している。34 ~ 37 はチャート製の剥片である。37 は剥離面の稜線が潰れており、火打石片と考えられる。38 は砂岩製の砥石である。側面は擦切って整形されており、両面には研磨痕が見える。39 は鉄製の火打金である。

陶磁器類(第 17 図 40 ~ 59) 40・41 は龍泉窯系の青磁碗片である。40 は内面に蓮華文が描かれており、口縁部の端部が玉縁を呈する。41 は外面に縦方向の櫛目が入る。大宰府分類 I 類(太宰府市教育委員会 2000)に属するものと考えられる。42 は青磁碗の口縁部である。43 ~ 46 は景徳鎮窯系陶磁器の破片である。43 は碗の口縁部で、端部が外反する。内外面に界線が描かれる。44 は皿の口縁部である。内外面に界線が描かれる。45 は椀の胴部から高台が残存している外面に唐草文、見込みに界線が描かれており、見込みの断面は外面から内面に押し出されている。小野分類VII類(饅頭心碗)(小野 1982)のものと考えらえる。46 は碗の高台付近で、見込み内に界線と蓮華文、高台外側に界線が描かれている。47 ~ 58 は近世以降の国産陶磁器類である。47 は唐津焼の碗の口縁部片である。端部は外反し、釉薬に貫入が入る。17 世紀後半のものとみられる。48 ~ 50 は碗の口縁部片である。52 は白磁の碗で、花が陰刻されている。

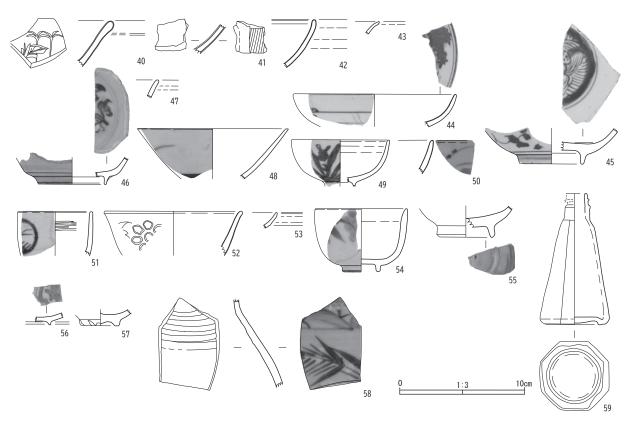
その他(写真1) SA33 の炉跡の埋土をフローテーションし、炭化種実等の採取を行った結果、埋土中よりオオムギ・堅果類などを採集した。



第15図 遺物実測図① (土器・土師器類)



第16図 遺物実測図②(石器・鉄製品類)



第17図 遺物実測図③(陶磁器類)

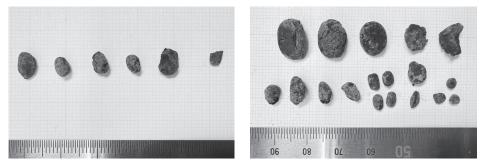


写真1 SA33 炉跡出土炭化種実(左:焼土(2層)より採取、右:焼土下の褐色土(3層)から採集)

第2表 遺物観察表① (土器類)

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	口径	法量(cm) 底径 器高	調 内面	整技法 外面	色調	外面	焼成	胎土	備考
1	土器		口縁部	G5 SC351			ナデ	ナデ	淡黄 (2.5Y8/3)	淡黄 (2.5Y8/4)	良好	7mm以下の褐色粒と5mm以下の白色及び灰色粒を少量含む	
2	土器		脚部	SC524		(10)	ナデ	ナデ	黄橙 (10YR8/6)	浅黄橙 (10YR8/4)	良好	3mm以下の黒色粒をわずかに含み、1mm以下の白色及び黒 色粒を少量含む	
3	土器		口縁部	SZ614			ナデ	ナデ	にぶい黄褐] (10YR5/3)	褐 (10YR4/6)	良好	3mm以下の白色粒と、1mm以下の透明光沢粒及び黒色光沢 粒を少量含む	
4	土器	甕	口縁部	SZ614			ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR8/4)	良好	2mm以下の灰白色粒をわずかに含み、微細な透明及び黒色光 沢粒を少量含む	
5	土器	甕	口縁部	SZ614	(18.9)		ハケ目	ハケ目	浅黄 (2.5Y8/4)	浅黄 (2.5Y7/4)	良好	3mm以下の褐色粒と2mm以下の灰白色粒をわずかに含む	
6	土器		胴部	SZ614					灰黄褐 (10YR5/2)	にぶい黄褐 (10YR5/4)	良好	5mm以下の灰白色粒と微細な透明光沢粒及び灰白色粒を少量 含む	免田式、重弧文
7	土器		胴部	SZ614			ナデ	ナデ	にぶい黄褐 (10YR6/3) ・暗灰黄	灰黄褐 (10YR4/2)	良好	2mm以下の透明及び無色光沢粒を少量含み、2mm以下の灰白 色粒をわずかに含む	貼付突帯
8	土器	鉢	胴部	SZ614			ナデ	ナデ	にぶい黄褐 (10YR7/4・7/5)	橙 (7.5YR7/6)	良好	3mm以下の褐灰色粒と2mm以下の白色粒をわずかに含み、2mm 以下の黒色光沢粒を少量含む	
9	土器		胴部	G4					にぶい黄褐 (10YR5/4)	灰黄褐 (10YR4/2)	良好	2mm以下の黒色光沢粒をわずかに含む	磨消縄文
10	土器		胴部	D~G1 · 2					灰黄褐 (10YR5/2)	褐(7.5YR4/4)	良好	1mm以下の黒色及び褐色粒をわずかに含む	磨消縄文
11	土器		口縁部	A3				工具ナテ	· 淡黄 (2.5Y8/3)	淡黄 (2.5Y8/3)	良好	5mm以下の褐色粒を少量含む	
12	土器		口縁部	B4				ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/4)	良好	4mm以下の褐色及び灰白色粒を少量含み、1mm以下の黒色 及び透明な光沢粒をわずかに含む	
13	土器		口縁部	A~C3 · 4					浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	良好	2mm以下の褐色粒及び金雲母粒と、1mm以下の黒色及び灰 白色光沢粒をわずかに含む	
14	土器	碗	口縁~腓	F5	(13.8)		ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (5YR6/8)	良好	3mm以下の黒色粒と1mm以下の白色粒をわずかに含み、1mm 以下の透明及び黒色光沢粒を少量含む	
15	土器		口縁部	表採			ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	良好	2mm以下の灰白色粒と黒色光沢粒をわずかに含み、微細な金雲母・黒色粒・透明光沢粒が少量含まれる	
16	土器	甕	口縁部	表採			ハケ目	ハケ目	淡黄 (2.5Y8/3)	淡黄 (2.5Y8/4)	良好	5mm以下の褐色及び灰色粒を少量含み、2mm以下の黒色光沢 粒及び微細な透明光沢粒がわずかに含まれる	
17	土器	甕	口縁部	表採			ナデ	ナデ	灰白 (10YR8/1)	灰白 (10YR8/2)	良好	4mm以下の灰白及び褐色粒をわずかに含み、微細な透明光沢 粒を少量含む	
18	土器		頭~胴部	3 G4				ナデ	暗灰黄 (2.5Y4/2)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	2mm以下の白色粒をわずかに含み、1mm以下の透明及び黒 色光沢粒を少量含む	
19	土器		頸~胴部	3 崩落土			ユビオ サエ ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	明褐 (7.5YR5/6)	良好	2mm以下の灰白色粒と微細な黒色及び透明な光沢粒を少量含む	
20	土器		胴部	D4			ナデ ハケ 後、ナ デ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	明褐 (7.5YR5/6)	良好	2mm以下の灰白色粒及び1mm以下の黄色粒を少量含む	内面に一部黒斑あり
21	土器	甕	胴部	A~D5 · B~C6				ハケ目	橙 (5YR6/8)	明黄褐 (10YR8/6)	良好	2mm以下の灰白色及び黒色光沢粒を少量含む	布留系、一部スス付着
22	土器	甕	胴部	D3~G3				ハケ目	橙 (7.5YR6/6)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	2mm以下の透明及び灰白色・黒色光沢粒を少量含む	布留系、スス付着
23	土器		胴部	崩落土				ハケ目	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	4mm以下の黒色・灰白色・褐色・褐灰色粒を少量含み、微細 な黒色及び透明な光沢粒をわずかに含む	
24	土器	壺	胴部	B ⋅ C3, A~ D4					にぶい黄橙 (10YR7/4)	橙 (7.5YR6/6)	良好	2mm以下の黒色及び灰白色光沢粒を少量含み、1mm以下の 透明光沢粒をわずかに含む	
25	土器 -	長頸壺	胴部	B ⋅ C3, A~D4					にぶい黄橙 (10YR6/4)	褐 (7.5YR4/4)	良好	3mm以下の灰白色粒を少量含み、微細な透明光沢粒をわずか に含む	免田式、重弧文
26	土器 -	長頭壺	胴部	D~G1 · 2					灰黄褐 (10YR4/2)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	良好	4mm以下の灰白色粒を少量含み、微細な光沢粒をわずかに含む	免田式、重弧文
27	土器	脚付甕	脚部	A~D5 ⋅ B~C6				ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	明黄橙 (10YR6/6)	良好	2mm以下の黒色光沢粒をわずかに含み、微細な黒色及び透明な光沢粒を少量含む	肥後系脚付甕脚部、内 面に砂付着あり
28	土器		脚部	A4				ナデ	浅黄 (2.5Y7/4)	淡黄 (2.5Y8/4)	良好	2mm以下の雲母粒と、1mm以下の透明及び黒色光沢粒を少量含む	
29	土器		底部	B4		(6)		ナデ	橙 (5YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	5mm以下の黒褐色粒を多く含み、2mm以下の白色粒を少量含む	
30	土器	壺	底部	A5~D5		3.5		ナデ	浅黄 (2.5Y7/3)	橙 (7.5YR7/6)	良好	2mm以下の褐色及び黒色粒をわずかに含む	
31	須恵器			表採		· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	当て具 痕	タタキ	灰白 (2.5Y7/1)	灰 (5Y5/1)			

## 第3表 遺物観察表②(石器・鉄製品類)

図面	種別	素材	山土地占	出土地点			重量	備考
番号	号 性別 系材		五工地点	最大長	最大幅	最大厚		
32	石鏃	チャート	A5 SC 532	3.1	2,1	0.45	2.2g	先端、片脚欠損
33	石鏃	チャート	S Z 614	2.9	1.6	0.45	1.3g	片脚 欠損
34	剝片	チャート	S Z 614	2.6	2.7	0.5	3.1g	
35	剥片	チャート	D ~G1 ⋅ 2	1.8	1.3	0.5	1.1g	
36	剝片	チャート	表採	1.4	0.9	0.1	0.2g	
37	火打石片	チャート	表採	2.4	1.7	0.9	3. 4g	稜の潰れ、打痕あり
38	砥石	砂岩	表採	6.2	4.6	0.8	28. 9g	側面擦切り、両面を使用
39	火打金	鉄		5. 7	2.2	0.3	16.1g	

#### 第4表 遺物観察表③ (陶磁器類)

						法量(cr	m)		色調			
遺物 番号	種別	器種	部位	出土地点	口径	底径	器高	内面	外面	焼成	胎土	備考/分類
40	青磁	碗	口縁部	崩落土				オリープ灰 (10Y6/2)	オリープ灰 (10Y6/2)	堅緻	精良	能泉窯系、内面施文
41	青磁	碗	胴部	崩落土				明オリーブ灰 (2.5GY7/1)	明オリーブ灰 (2.5GY7/1)	堅緻	精良	龍泉窯系、外面櫛猫 大宰府分類 I 類
42	青磁	碗	口縁部	崩落土				明オリーブ灰 (2.5GY7/1)	明オリーブ灰 (2.5GY7/1)	堅緻	精良	<b>人</b> 辛耐刀球 ↓ 球
43	陶磁器		口縁部	B ⋅ C3, A~D4				明緑灰 (7.5GY8/1)	明緑灰 (7.5GY8/1)	堅緻	精良	景徳鎮窯系、口縁端反り、内外面に界線が描かれる
44	陶磁器	Ш	口縁~胴部		(12.8)			灰白 (5GY8/1)	灰白 (5GY8/1)	堅緻	精良	景徳鎮窯系。小野分類IX類 内外面に界線、内面に
45	陶磁器	碗	胴部~底部	崩落土		(5)		明緑灰 (7.5GY8/1)	明緑灰 (10GY8/1)	堅緻	精良	対が加に外線、対面に 景徳鎮窯系。饅頭心椀。小野分類√1類 外面:唐草文、見込み内:界線、畳付きは釉薬を削りとる
46	陶磁器	碗	胴部~底部	崩落土		(5.4)		明緑灰 (10GY8/1)	明緑灰 (10GY8/1)	堅緻	精良	界徳鎮窯系、高台: 界線、見込み内: 界線・連華文
47	陶磁器	碗	口縁部					浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	堅緻	精良	唐津焼椀、表面の貫入が目立つ 端反、17世紀後半
48	陶磁器	碗	口縁~胴部		(12)			灰白 (N8/)	灰白 (N8/)	堅緻	精良	外面施文
49	陶磁器	碗	口縁~底部	G5 SC351	(7.8)			灰白 (N8/)	灰白 (N8/)	堅緻	精良	
50	陶磁器	碗	口縁部					灰白 (10Y8/1)	灰白 (10Y8/1)	堅緻	精良	外面施文
51	陶磁器		口縁~胴部	崩落土	(5.8)			灰白 (10Y8/1)	灰白 (5GY8/1)	堅緻	精良	外面施文
52	陶磁器	碗	口縁部	崩落土	(11)			明緑灰 (10GY7/1)	明緑灰 (7.5GY7/1)	堅緻	精良	外面施文
53	陶磁器		口縁部	崩落土				灰オリーブ (5Y5/2)	灰オリーブ (5Y5/2)	堅緻	精良	
54	陶磁器	碗	口縁~底部		(7.2)	(3)	5	灰白 (N8/)	灰白 (2.5GY8/1)	堅緻	精良	外面施文、高台内施釉 量付きの釉薬は削り取っている
55	陶磁器	碗	胴部~底部			(4.1)		明緑灰 (10GY8/1)	明緑灰 (10G7/1)	堅緻	精良	外面施文
56	陶磁器		底部					灰白 (N8/)	灰白 (10Y8/1)	堅緻	精良	見込み内施文 量付きは釉薬を削り取る
57	陶磁器	碗	底部	D~G1 ⋅ 2		2.9		黄褐 (2.5Y4/1)	(2.5Y4/1) -	堅緻	精良	高台は別づくり、見込み内突出、 高台内施融なし
58	陶磁器	徳利	頸~胴部					灰白 (5Y7/1)	明オリーブ灰 (2.5GY7/1)	堅緻	精良	外面施釉、轆轤使用
59	ガラス瓶		口縁~底部		(1.5)	5.5	10.4					栓形状はスクリュウー

## 第5表 調査区内検出土坑の計測値一覧表

遺構 番号	種類	土色	長軸×短軸×深さ (すべてm)	備考	遺構 番号	種類	土色	長軸×短軸×深さ (すべてm)	備考
1	土坑	В	$0.90 \times 0.88 \times 0.20$	5mm程のアカホヤ粒	151	土坑	A	1,32×0,89×0,21	
2	土坑	В	$0.84 \times 0.72 \times 0.21$	5mm程のアカホヤ粒	153	土坑	В	$0.85 \times 0.83 \times 0.13$	
3	土坑	В	$0.73 \times 0.56 \times 0.08$	5mm程のアカホヤ粒	155	土坑	D	$0.68 \times 0.62 \times 0.05$	2cm程の木炭を多量に含む。一部アカホヤが混じる。
4	土坑	В	$0.85 \times 0.83 \times 0.13$	5mm程のアカホヤ粒	203	土坑	В	$0.73 \times 0.75 \times 0.13$	アカホヤ含む。15cm程の礫あり。
5	土坑	В	$0.93 \times 0.87 \times 0.18$	5mm程のアカホヤ粒	208	土坑	В	$0.96 \times 0.95 \times 0.30$	わずかに炭を含む。アカホヤ、灰色土が混じる。
6	土坑	В	$0.95 \times 0.92 \times 0.12$	5mm程のアカホヤ粒 小礫、炭化物を僅かに含む	210	土坑	В	$0.99 \times 0.93 \times 0.41$	僅かにアカホヤを含む。
7	土坑	В	1.09×0.99×0.18	5mm程のアカホヤ粒 3mm程の炭を少量含む。3cm程の樹痕あり。	211	土坑	В	$0.50 \times 0.50 \times 0.26$	lcmの礫含む。
9	土坑	В	$1.0 \times 0.86 \times 0.15$	5~30cm程の礫を含む。少し、炭が混じる	228	土坑	В	1,05×0,38×0,15	lcmの礫を含む。
10	土坑	В	$0.86 \times 0.64 \times 0.13$	10~20cmの礫を含む。	232	土坑	A	$0.80 \times 0.73 \times 0.15$	アカホヤを少量含む。
12	土坑	В	$0.55 \times 0.50 \times 0.31$	3mm程の炭を僅かに含む。アカホヤが一部混じる。	233	土坑	A	1.02×0.86×0.18	2mmの礫を少量含む。
13	土坑	В	1.00×0.98×0.32	炭をごく少量含む	237	土坑	A	1,13×1,02×0,50	
18	土坑	В	$0.46 \times 0.40 \times 0.13$	5mm程の礫を含む。	240	土坑	A	1,18×0,94×0,21	アカホヤを少量含む。
19	土坑	В	1.18×0.53×0.23	lcm程の炭、一部アカホヤが混じる。	265	土坑	В	0.89×0.66×0.11	
23	土坑	В	1.00×0.92×0.27	炭を多く含む。一部アカホヤを含む。3cm程の樹痕あり	266	土坑	В	1,02×0,82×0,10	
24	土坑	В	$0.40 \times 0.36 \times 0.22$		279	土坑	A	1,09×0,90×0,29	3mmの炭をわずかに含む。
25	土坑	В	$0.73 \times 0.63 \times 0.15$		304	土坑	В	1,04×0,96×0,12	アカホヤ少量含む。
26	土坑	В	1.10×0.90×0.10	炭を多く含む。10cm程の樹痕が多数あり	315	土坑	В	$0.55 \times 0.55 \times 0.09$	アカホヤ僅かに含む。
27	土坑	D	$0.86 \times 0.67 \times 0.22$	2cm程の焼土が混じる程の炭を多量に含む。5cm程の樹痕あり。	316	土坑	В	$0.81 \times 0.73 \times 0.17$	僅かに炭を含む。
28	土坑	В	1.00×0.99×0.10		331	土坑	В	$0.95 \times 0.93 \times 0.43$	
30	土坑	В	1,15×1,07×0,38	5cm程のアカホヤが混じる。	332	土坑	В	1.07× (0.79) ×0.14	3mm程の炭を僅かに含む。
31	土坑	В	1,26×1,26×0,45	3mm程の炭をごく僅かに含み、5mm程のアカホヤ粒が混じる。	333	土坑	В	0.90×0.80×0.13	2cm程の黒土、5mm程のアカホヤ粒を含む。
35	土坑	В	1.05×0.91×0.27	1:5mm程の炭を僅かに含む。5mm程のアカホヤ粒を含む。	335	土坑	В	1.09×1.07×0.38	アカホヤ少量含む。
				2:1cm程のアカホヤを多く含む。	337	土坑	В	1.05×0.90×0.08	20cm程の礫を含む。
36	土坑	В	1.09×0.97×0.25		349	土坑	A	$0.80 \times 0.68 \times 0.16$	
44	土坑	В	0.33×0.27×0.19	3mmの炭を僅かに含む。	351	土坑	В	$0.77 \times 0.74 \times 0.10$	
45	土坑	В	0.78×0.58×0.08	2mmの炭を僅かに含む。	419	土坑	C	$0.79 \times 0.76 \times 0.11$	
47	土坑	В	0.90×0.74×0.18	2cmの礫を僅かに含み、1mmの炭をごく僅かに含む。	443	土坑	В	$1.51 \times 0.71 \times 0.30$	5cm程の礫あり。一部アカホヤが混じる。
49	土坑	В	1,48×1,10×0,24	lcm程の礫を僅かに含む。5mm程のアカホヤ粒を含む。	444	土坑	В	$0.69 \times 0.50 \times 0.15$	炭を含む。焼土
50	土坑	В	$0.70 \times 0.53 \times 0.28$		445	土坑	В	$0.52 \times 0.52 \times 0.21$	
61	土坑	В	0.87× (0.46) ×0.21		448	土坑	В	$1.00 \times 0.87 \times 0.21$	
62	土坑	В	$0.70 \times 0.64 \times 0.14$	1cm程の炭をごく僅かに含む。一部アカホヤ	495	土坑	В	0,49×0,46×0,28	
63	土坑	В	$0.98 \times 0.96 \times 0.17$	2cm程の礫を含み、2cm程のアカホヤが混じる。	497	土坑	A	$0.35 \times 0.30 \times 0.10$	3cmの礫を含む。
64	土坑	В	0.99×0.98×0.20	1cm程のアカホヤ粒が混じる。	564	土坑	C	$0.50 \times 0.40 \times 0.17$	lcmの炭含む
66	土坑	D	$0.91 \times 0.77 \times 0.10$	3㎝程の炭を多く含む。	565	土坑	C	0.41×0.28×0.14	2cmの炭含む
77	土坑	В	$0.75 \times 0.35 \times 0.15$	1mm程の炭を僅かに含む。	573	土坑	В	$0.71 \times 0.70 \times 0.2$	
98	土坑	A	0.82×0.77×0.11	2cm程のアカホヤを含み、5mm程の炭をごく僅かに含む。	607	土坑	C	0.48×0.31×0.06	
105	土坑	В	$0.95 \times 0.91 \times 0.12$	5mm程のアカホヤ粒を含み、3mm程の炭を僅かに含む。	※深さ	は遺構の	中心点と	:上端の最も標高が高い位置	のレベルの数値とした。
116	土坑	В	$0.92 \times 0.78 \times 0.19$		%A: Ø	色土 ()	[[層由来	の埋土)、B:黒色土(IX層	由来の埋土)、C:褐色土(XI層由来の埋土、D:焼土・炭化物を多量に含む
143	土坑	В	$0.79 \times 0.77 \times 0.15$						
146	土坑	A	$0.77 \times 0.74 \times 0.08$						

## 第IV章 自然科学分析

株式会社 古環境研究センター

## 第1節 自然科学分析の概要

樋口遺跡から採取された試料(炭化材)について自然科学分析を行った。分析内容は、放射性炭素 年代測定4点、樹種同定2点である。以下に、各分析項目ごとに試料の詳細、分析方法、分析結果お よび考察・所見を記載する。

## 第2節 放射性炭素年代測定

- 1. はじめに 放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (<sup>14</sup> C) の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木 や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測 定が可能である (中村 2003)。
- 2. 試料 試料は、SA33 (竪穴建物跡)、SC92 (竪穴遺構)、SC120 (土坑)、SC328 (陥し穴跡) から採取されたNo.1、No.2、No.3、No.6の4点である。第6表に試料の詳細を示す。

#### 3. 方法

前処理として酸-アルカリ-酸処理(AAA処理)を実施し、加速器質量分析法(AMS法)で測定を行った。

#### 4. 測定結果

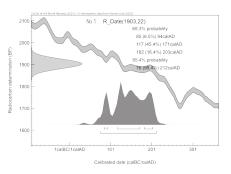
AMS 法によって得られた <sup>14</sup> C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (<sup>14</sup> C) 年代および暦年代(較正年代)を算出した。第6表にこれらの結果を示し、第18図に各試料の暦年較正結果(較正曲線)、第19図に暦年較正年代フルチプロット図を示す。

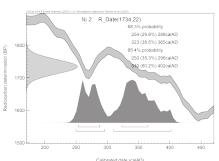
## (1) δ 13 C測定値

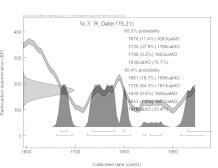
試料の測定 <sup>14</sup> C / <sup>12</sup> C 比 を補正するための炭素安 定同位体比 (<sup>13</sup> C / <sup>12</sup> C)。 この値は標準物質 (PDB)

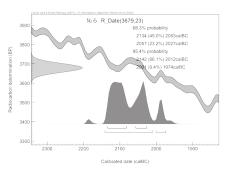
第6表 樋口遺跡の放射性炭素年代測定結果

試料	測定No.	則定No. 試料の詳細 種類		前処理	δ <sup>13</sup> C	<sup>14</sup> C年代	曆年較正用	曆年代(輔	文正年代)
No.	IAAA-	政権の特別	相級	測定法	(%)	(年BP)	年代(年BP)	1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
1	221601	S33, 竪穴建物跡	炭化材	AAA処理 AMS法	-28. 13±0. 26	1900±20	1903 ± 22	cal AD 85-94 (6.5%) cal AD 117-171 (45.4%) cal AD 182-203 (16.4%)	cal AD 76-212 (95.4%)
2	221602	S92, 堅穴遺構	炭化材	AAA処理 AMS法	-23.14±0.23	1730±20	1734±22	cal AD 254-288 (29.8%) cal AD 323-365 (38.5%)	cal AD 250-296 (35.3%) cal AD 310-402 (60.2%)
3	221603	S120, 土坑	炭化材 (クスノキ科)	AAA処理 AMS法	-26.61±0.18	180 ± 20	175±21	cal AD 1670-1683 (11.4%) cal AD 1735-1780 (37.9%) cal AD 1799-1803 (3.2%) cal AD 1930 (15.7%)	cal AD 1661-1695 (18.7%) cal AD 1725-1813 (54.3%) cal AD 1839-1845 ( 0.6%) cal AD 1853-1877 ( 1.5%) cal AD 1916 (20.4%)
6	221604	S328, おとし穴跡	炭化材	AAA処理 AMS法	-24.82±0.20	3680±20	3679±23	cal BC 2134-2083 (45.0%) cal BC 2057-2027 (23.2%)	cal BC 2142-2012 (86.1%) cal BC 2001-1974 ( 9.4%)









第18図 暦年較正結果

の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の δ <sup>13</sup> C 値を-25(‰)に標準化する ことで同位体分別効果を補正 している。

<u>#</u>\_ R\_Date 441-1 R\_Date 441-2 R\_Date 441-3 R\_Date 441-6 3000 1calBC/1calAD 2001

(2) 放射性炭素(<sup>14</sup>C) 年代

第19図 暦年較正年代マルチプロット図

#### 測定値

試料の 14 C /12 C 比から、現在 (AD1950 年基点) から何年前かを計算した値。 14 C の半減期は 5730 年であるが、国際的慣例により Libby の 5568 年を使用している。付記した統計誤差(±)は  $1\overset{\frown}{\sigma}$  (68.2%確率) である。 $^{14}$  C年代値は下 1 桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線 が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年較正用年代値を併記した。

- (3) 暦年代(Calendar Years) 放射性炭素(<sup>14</sup>C)年代を実際の年代値に近づけるために、過去の宇 宙線強度や地球磁場の変動による大気中 <sup>14</sup> C濃度の変動や <sup>14</sup> Cの半減期の違いを較正している。暦 年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な <sup>14</sup> C 測定値および福井県水月湖の年縞堆積物データなど により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータは IntCal20、較正プログラムは 0xCal4.4 である。暦年代(較正年代)は、<sup>14</sup> C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、 OxCal の確率法により2σ (95.4%確率)で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の値が表記 される場合もある。() 内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の 曲線は<sup>14</sup> C年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。
- 5. 所見 加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定の結果、№ 1 (SA33)では 1900 ± 20 年 BP(2 σの暦年代で AD76 ~ 212 年)、No. 2 (SC92)では 1730 ± 20 年 BP(AD250 ~ 296, 310 ~ 402 年)、 No.3 (SC120) では 180 ± 20 年 BP (AD1661 ~ 1695, 1725 ~ 1813, 1839 ~ 1845, 1853 ~ 1877, 1916 ~ 年)、No.6 (SC328) では 3680 ± 20 年 BP (BC2142 ~ 2012, 2001 ~ 1974 年) の年代値が得られた。な お、樹木(炭化材)による年代測定結果は、樹木の伐採年もしくはそれより以前の年代を示しており、 樹木の心材に近い部分や転用材が利用されていた場合は、遺構の年代よりも古い年代値となることが ある。

#### 第3節 樹種同定

- 1. はじめに 木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹 種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の 森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がか りとなる。
- 試料 試料は、SC120 から採取された炭化材2点(№4、№5)である。試料の詳細を第7表に示す。
- 3. 方法 以下の手順で炭化材の樹種同定を行った。
  - 1) 試料を洗浄して付着した異物を除去
  - 2) 試料を割折して木材の基本的三断面(横断面:木口,放射断面:柾目,接線断面:板目)を作成
  - 3) 落射顕微鏡(40~1000倍)で観察し、木材の解剖学的形質や現生標本との対比で樹種を同定

- 4. 結果 第7表に同定結果を示し、写真2に各分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった 木材構造の特徴を記す。
- 1) クスノキ科 Lauraceae 中型から小型の道管が単独および2~数個放射方向に複合して散在する 散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。道管の穿孔は単穿孔のものが存 在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる異性放射組織型で1~ 3細胞幅である。以上の特徴からクスノキ科に同定される。クスノキ科には、クスノキ、ヤブニッケ イ、タブノキ、カゴノキ、シロダモなどがあり、道管径の大きさ、多孔穿孔および道管内壁のらせん 肥厚の有無などで典型的なものは細分できるが、道管径以外が不明瞭なためクスノキ科の同定にとど めた。
- 2) サクラ属 Prunus バラ科 丸い道管が単独あるいは2~3個放射方向および斜め方向に複合して 散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。道管の穿孔は 単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性に近い異性放射組織型を示す。以 上の特徴からサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、 ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

#### 5. 所見 樹種同定の結果、

SC120 から採取された炭化材 第7表 樋口遺跡における樹種同定結果 の№.4 (サンプル1) はクス ノキ科、No.5 (サンプル2) はサクラ属と同定された。ク スノキ科は、概して強さ中 庸で、油分が多く耐水性が あり建築材や井戸側板など に利用される。薪炭材とし ては、油分が多く火持ちの 良い材である。クスノキ科 のクスノキは防腐・防虫作 用がある。

サクラ属は、耐朽・保存 性の高い材で、切削・加工 の難度は中庸で概して堅硬 な材であり、鉢などの容器 に利用される。サクラ属の 薪材は、火持ちなどはカシ 類やナラ類に劣るが、比較 的早く着火することから中 薪に利用される。

No.	試料の詳細	結果 (学名/和名)
4	SC120, サンプル1	Lauraceae クスノキ科
5	SC120, サンプル2	Prunus サクラ属

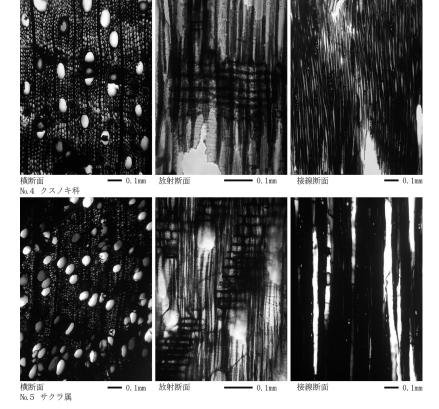


写真2 樋口遺跡の木材写真

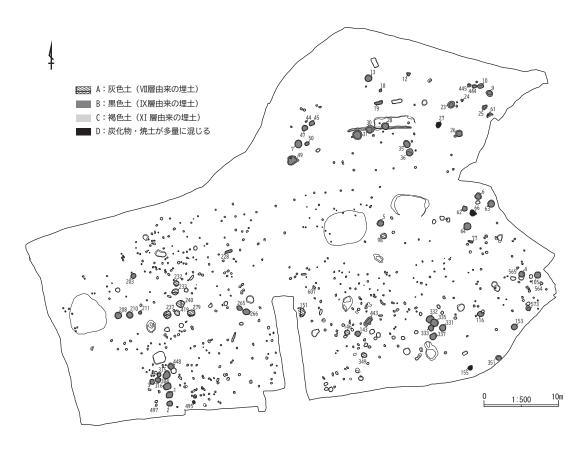
## 第V章 総括

樋口遺跡は室野川に面した南向き斜面に立地しており、今回の調査では散発的ではあるが縄文時代から近世までの遺構・遺物を検出した。以下、各時期の様相について概述し総括とする。

**縄文時代** 縄文時代後期の磨消縄文土器片が出土しており、陥し穴跡が検出された。2点出土した打製 石鏃はチャート製で、石核や一定量の加工剥片は出土していないため廃棄されたものと考えられる。

弥生時代・古墳時代 竪穴建物跡 1 基・土坑 2 基が検出された。出土遺物には、免田式土器長頸壺・布留系甕の胴部片があり、弥生時代の終わりから古墳時代前期にかかる時期のものである。炭素年代測定の結果、SA33 炉跡と SC92 の炭化物を使用した放射性炭素年代測定では、SA33 で弥生時代後期、SC92 で弥生時代後期から古墳時代前期にあたる年代を得た。室野川を挟んだ対岸には古墳時代後期の集落跡である広木野遺跡や広木野横穴墓が分布しており、樋口遺跡はそれらに先行する集落の一部だったと考えられる。当該期の竪穴建物は 1 棟のみの確認であったが、集落の中心は隣接地に残存している可能性が考えられる。

中世〜近世 掘立柱建物跡 4 棟・土坑 1 基が検出された。遺構からの出土遺物は確認されていないが、SC120 で出土した炭化材の炭素年代測定では 17 世紀初頭の数値を得ている。調査区内では SC120 と同形の直径 1 mほどの円形の土坑が多数見つかっている (第5表)。時期は特定できないが、それらの埋土は基本土層のVII層またはIX層に由来するもので、第20図のような分布状況にある。基本土層 I ~ VI 層は水田や畑での耕作や段々畑とするための造成によって堆積しており、 VII層以下はそれ以前の耕作



第20図 遺構埋土別分布図

等で使われていた際の堆積土である。SC120の埋土はIX層由来の黒色土であることから、VII・IX層の堆積時期は17世紀初頭以降と考えられる。SB615は北側梁行に沿う形で溝跡(S617)を伴っている。S617はSA33・S28・30と切り合い関係にあり、掘削順序はSA33→S617→S28・30である。S28・30の埋土はSC120と同じIX層由来の黒色土であることから、SB615はSC120と同時期かそれ以前に使用された建物と推測される。また、他のSB491・492・493は、梁行のプランや建物の配置から同時期に建っていた建物跡と考えられ、SB615とは柱穴間の距離や床面積が近似する事から近い時期の遺構とみられる。以上から、間接的ではあるが樋口遺跡で検出した掘立柱建物跡は、近世またはそれ以前の所産であると考えられる。

以上のように樋口遺跡の調査では、縄文時代から近世に至る斜面の土地利用の一端を示す情報を得ることができた。

#### 【引用・参考文献】

#### □研究論文

伊東隆夫・山田昌久 2012『木の考古学. 出土木製品用材データベース』海青社 p449

乙益重隆 1960「二 高千穂の先史文化」『高千穂 阿蘇-総合学術調査報告』神道文化会 pp59-78

小野正敏 1982「15~16世紀の染付椀、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 pp71-87

甲斐亮典 監修 2008『図説東臼杵・西臼杵の歴史』宮崎県の歴史シリーズ 郷土出版社

後藤寅五郎 1938 (1951 再刊)『村のおもかげ』「村のおもかげ」編纂委員会

島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司 1985『木材の構造』文永堂出版 p290

島地 謙・伊東隆夫 1988『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣 p296

中村俊夫 2000「放射性炭素年代測定法の基礎」日本先史時代の 14C 年代編集委員会編『日本先史時代の 14C 年代』日本第四紀学会 pp3-20

中村俊夫 2003「放射性炭素年代測定法と暦年代較正」『環境考古学マニュアル』同成社 pp301-322

宮崎敬史 2001「所謂免田式土器の再吟味 - 免田式土器様式の研究の前に-」『久保和土君追悼考古論文集』久保和土君追悼考古 論文集刊行会 pp45-68

北郷泰道 1978「祖母・傾山系山岳地域論序説」『考古学研究』 25-3 考古学研究会 pp71-85

北郷泰道 1983「祖母・傾の南―その考古学的世界―」『えとのす』22 新日本教育図書 pp124-130

山田昌久 1993「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成-用材から見た人間・植物関係史」『植生史研究特別 1 号』植生史研究会 p242

吉田章一郎 1960「三 高千穂の原始文化」『高千穂 阿蘇 総合学術調査報告』神道文化会 pp78-88

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), pp337-360

Paula J Reimer et al., (2020) The IntCal 20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 kcal BP) Radiocarbon, 62(4), pp725-757

#### □発掘調査報告書等

あさぎり町教育委員会 2022『本目遺跡のあゆみ』あさぎり町文化財調査報告書5

熊本県教育庁文化課 2010『小野原遺跡群』熊本県文化財調査報告 257

熊本県教育委員会 2019『幅・津留遺跡』熊本県文化財調査報告 336

熊本県立装飾古墳館 1993『弥生人の祈り 免田式土器の謎』企画展図録 3

五ヶ瀬町 1981『五ヶ瀬町史』

五ヶ瀬町教育委員会 1990『下赤谷横穴墓群』五ヶ瀬町文化財調査報告書第1集

太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊跡XV』 太宰府市の文化財 49

宮崎県教育委員会 1998『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書』 I

宮崎県埋蔵文化財センター 1997『広木野遺跡 神殿遺跡 A 地区』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第7集



写真3 樋口遺跡遠景(南西から)



写真4 調査区全景(上が北)



写真5 調査区中央部土層確認用壁面(東から)



写真6 調査区東壁土層断面(西から)



写真7 調査区周辺法面土層断面(南から)



写真8 SA33 炉跡検出状況(南から)



写真9 SC92 完掘状況(南西から)



写真 10 SC328 完掘状況(南から)



写真 11 SC473 完掘状況 (南から)



写真 12 SC524 完掘状況 (南から)



写真 13 SC120 炭化材出土状況(北西から)



写真 14 SB491・492・493 完掘状況 (オルソ画像)



写真 15 出土土器類



写真 16 出土陶磁器類



写真 17 出土石器類



写真 18 火打金

## 報告書抄録

ふりがな	ひぐちい	ひぐちいせき										
書 名	樋口遺跡	樋口遺跡										
副書名	国道218	国道218号五ヶ瀬高千穂道路(室野工区)整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書										
シリーズ名	宮崎県地	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書										
シリーズ番号	第267集	第267集										
編著者名	留野 個	留野 優兵										
発 行 機 関	宮崎県地	宮崎県埋蔵文化財センター										
所 在 地	₹880-0	〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地 TEL 0985-36-1171										
発行年月日	2024年	2024年2月16日										
ふりがな	ふり	がな		コー	- F	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因		
所収遺跡	所在	E地	市町	吋村	遺跡番号	イレが年	<b>米</b> 腔	<b>神色</b>	列 到 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 1	神鱼水凸		
<sup>ひぐちいせき</sup> 樋口 遺跡	<sup>みやざきけん</sup> 宮崎県					32 度	131 度	2022. 7. 2	G			
		にしうすきぐんごかせちょう 西臼杵郡 五ケ瀬町		43		41分	12分	~	約 2500 ㎡	記録保存		
	大字三ヶ所 10527番地3他					04秒	46 秒	2022. 11. 3	30	調査		
元何净叶丸	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		1		主な遺構	付近	付近	連州	性到東	<b>五</b>		
所収遺跡名	作里方门	種別 時代 縄文時代		1 おした跡		3基	主な遺物縄文土器・石器		特記事項 			
樋口遺跡	散布地集落跡	7 02 0 7 7		File C / W/J					打製石鏃			
		弥生時代 古墳時代		竪穴建物跡		1基	弥生土器・石器 土師器		免田式土器長頸壺 布留系			
	中世~近時期不明		世掘立柱建物跡土坑・ピット多			1.4		龍泉窯系青磁 景徳鎮窯系染付 火打石片、火打金				
	樋口遺跡	樋口遺跡は五ヶ瀬町大字三ヶ所に所在する。五ヶ瀬川支流に面した丘陵部の南側斜面に立地して										
	おり、調査	おり、調査対象地は段々畑として利用されていた。調査の結果、縄文時代の陥し穴跡3基、弥生時代										
	後期の竪気	後期の竪穴建物跡1基、近世初頭以前の掘立柱建物跡4棟などが検出された。出土遺物には、縄文										
要約	時代後期の	時代後期の磨消縄文土器、弥生時代後期~古墳時代前期頃の免田式土器の長頸壺、土師器類、中近										
	世の陶磁器	世の陶磁器類(龍泉窯系青磁、景徳鎮窯系染付)がある。										
	縄文時何	縄文時代の陥し穴跡、古墳時代の竪穴建物跡、近世の掘立柱建物跡などから、断続的ではあるが、										
	当該地域の斜面地における土地利用を考えるための材料となる調査結果を得た。											

## 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第267集

## 樋口遺跡

国道218号五ヶ瀬高千穂道路(室野工区)整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2024年 2 月

発 行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地

TEL 0985 (36) 1171 FAX 0985 (72) 0660

印 刷 株式会社文昌堂

〒885 - 0004 宮崎県都城市都北町7166番地

TEL 0986 (36) 6600

FAX 0986 (36) 4660

## Gokase Town

# Higuchi Site

The Report of Excavation by Miyazaki Prefectural Archaeological Center vol.267

## 2024

Miyazaki Prefectural Archaeological Center